

2-8					
主題		機械浴廃止と全員個浴の実現			
副題		従来型特養の可能性			
キーワード 1	入浴はリゾート	キーワード 2	浴室改修	研究(実践)期間	12ヶ月
法人名・事業所名		社福) 日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホームフレンズホーム			
発表者(職種)		高橋栄樹(介護主任)、池沢梓(介護副主任)			
共同研究(実践)者		飯田能子(施設長)、野口敦史(介護職員)			
電話	03-3422-7211	FAX	03-3422-7227		
事業所紹介	昭和24年、保育事業からスタートした法人で、平成2年、保育園との合築の複合施設として開設。特養ホーム65床、短期入所4名、併設は通所介護事業所、地域包括支援センター。胃瘻にせず人間の尊厳を保持した終末期ケアを実践し、常食化、自然排泄、全員個浴に取り組んでいる。				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>平成13年3月に購入した機械浴槽が耐用年数を超え、平成27年度より、買い替えの時期を検討していた。併設のケアセンターと共有していた一般浴室は、平成21年度の改修工事で檜風呂2槽が設置され、職員は個浴ケアの技術を習得していた。平均要介護度4.3の利用者に対して、機械浴利用者は下肢が曲がらない等の身体上の理由で5人であったが、全員個浴を目指した浴室改修であったため機械を使わず安全に入浴させることが課題となった。平成29年度の事業目標では、浴室内の浴槽のレイアウト、先行施設の研修を取り組み課題とし、機械浴廃止、浴室改修に向けて動き出した。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>全員個浴を目標とした浴室改修の最大の難関は、機械浴に変わる浴槽の選定であった。既に機械浴を廃止した施設のご厚意により、入浴委員会のメンバーが〈3人浴槽〉による全介助者の入浴方法を体験することができた。その研修に平行して、設置業者によるレイアウトの提示があり、施設全体で改修に向かってスタートした。課題は改修工事施工業者も交えて、床の研工事とこれによって生ずる段差の解消方法であった。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>下肢が曲がらない等で個浴を使用できない利用者は5名であった。研修先施設の〈3人浴槽〉は3名の職員が浴槽の中に入り、浮力を利用して介助すると説明されたが、検討を進めるうちに、3人浴槽はかなりの湯量を要し、導入後のメンテナンスに要する職員の負担を考え、施設長から市販の洋式バスを使用する案が提示された。1人用の洋式バスであれば、2人介助により出浴時も楽に身体を引き上げられると考えた。また、湯を入れる前の浴槽は非常に軽く、必要に応じて浴室内を移動できる便利さがあった。工事完成後は浴槽への入れ方、出し方を入浴委員会のメン</p>					

バーが試行錯誤し、個々に合わせた方法を見つけていった。

《4. 取り組みの結果》

浴槽設置には床を26cm掘り下げる必要があり、その段差をどの様に解消するかを検討した。結果、浴室までのアプローチはスロープにせず、2か所の段差をつけ歩行可能者のリハビリを兼ねられるようにした。フロアからの誘導、浴室での介助、そして着衣、水分補給、各フロアへの誘導までの一連の流れを、1人の利用者に対し1人の介助者が最後まで行う完全な個別ケアとなった。洋式バス使用者は2人体制で介助しているが、入浴委員会の取り組みにより、身体の大きい利用者を洗身台に引き上げるためには、スライディングシートやゴムボールを使った様々の創意工夫が今も行われている。

《5. 考察、まとめ》

機械浴廃止の取り組みは、〈3人浴槽〉の検討を契機に、築28年で老朽化していた浴室全体を全面改修するという、施設長主導の大型プロジェクトに発展することになった。暗く殺風景なイメージであった地下の浴室が、中庭の光や壁の色等の工夫により明るい浴室に変わった。特養には特浴がある、又は特殊な機械類があるのが当たり前という概念を覆し、「施設のお風呂」の印象を変えた。自立支援を考慮した浴室は、重度化した入居者にも安全で安心できる個浴を提供する場所となった。ただただ重労働であった入浴介助が利用者と一緒にくつろげる時間に変わり、入浴を拒否する利用者が減り、職員の介護の負担と精神的負担が軽減した。加えてスケジュール化の可能な個浴ケアは、フロア業務にも余裕をもたらした事は想定外であった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

ひとり浴改革完全マニュアル 著者 青山幸広 関西看護出版

アクティビティ・サービス「心身と生活の活性化を支援する」 中央法規出版

《8. 提案と発信》

従来型特養であるフレンズホームが、入居者の満足度向上のために自己資金を投入し、機械を一切導入しない浴室を作った。機械浴の代わりとなる浴槽は、一般的には3人浴と呼ばれる個浴3槽分の浴槽だが、メンテナンスと職員の介護負担を鑑みて市販の洋式バスを導入し、アイデアを出しあいながら安全に介助する事ができた。洋式バスはシンプルな浴槽のため、体型や障害に合わせて工夫がしやすく、急に使用する場合でも、直ぐに湯が溜まる等、便利な点が多くある。入浴後に関しては、休憩室を作り美容室の様に鏡を見ながら髪を乾かし、不足しがちな水分もこの場所で補給して頂いている。また、職員用に入浴介助用のユニフォームを新調した結果、「入浴はリゾート」をキーワードに、入浴ケアが施設ケアの中心に位置づけられ、従来型特養の可能性を示したといっても過言ではない。利用者にとっては徹底した個別ケアを通して、入浴介助者がフロアに迎えに来てくれているのを自然に受け入れ、心待ちにしている。同時に職員は専門職としてのプライドを感じるようになった。今後も全ての入所者に入浴する楽しさ、職員と共有する至福の時間を味わって頂くために様々な工夫をしていきたい。